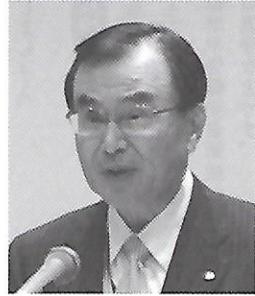


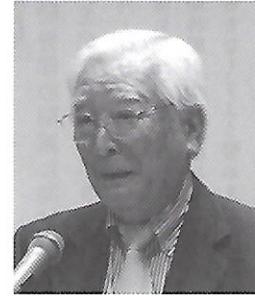
千葉大学画像系学科、百周年記念式典を開催 蒲嘉陵北京印刷学院副学長の記念講演も

平成28年10月15日(土)、国立大学法人千葉大学画像系学科が昨年創立百周年を迎えたことを記念して、百周年記念式典および記念祝賀会が開催された。記念式典では、主催者を代表して千葉大学の徳久剛史学長が、「この学科の最大の特徴は、情報や画像の入口から出口までを一貫して教育研究していることにあると思っております。これからも千葉大学は未来指向型の総合大学として次世代を切り拓く人材、並びにイノベーションに結び付く、研究成果の創出を介して社会貢献をするとともに、工学部画像系学科卒業生の皆さんにはこれまで世界の画像産業のトップを走っておられ、今後も後に続く後輩達を含めて世界の画像産業へ大きく貢献していただくことを祈念しております」と挨拶。また、同・関実工学部長は、「本学工学部画像系学科が培ってきた、画像情報をいかに作り出し、それをどのように受容するかという受け手側のメカニズムを含めて総合的な工学として広く研究することは、本学工学部にとって欠くべからざるものと確信しております」と述べた。

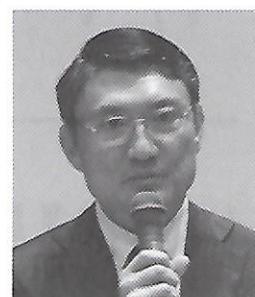
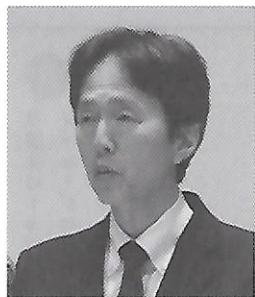


続いて、来賓を代表して(株)小森コーポレーションの小森善治代表取締役会長が挨拶。「画像系学

科ならではの使命と存在価値をぜひご確認いただき、これからも優秀な学生を業界に沢山送りたいという思いであります。現在印刷業界は変革の時期を迎えており、この状況において画像系の新しい技術やメディアが今後も印刷業界の発展のためにもますます重要になってきています。画像系学科で学ばれた大勢の優秀な人材がさまざまな企業や研究機関で幅広く活躍され、印刷業界の未来を担う千葉大学の関係の皆様、同窓会の皆様を中心に一致団結して取り組み、皆様方のますますのご発展、印刷業界の発展を祈念致しまして、挨拶とさせていただきます」。



また、DIC グラフィックス株の川村喜久取締役会長は、「DICにおいてもアナログの印刷インキにおけるより一層の高附加值化の追求は当然行っていますが、デジタル印刷分野においてもIJ、カラートナー、ディスプレイやデジタルサイネージなどの分野においては顔料、樹脂といった製品が大きく伸びており、画像分野はまだまだ成長分野であるという意味で、非常に重要な事業分野として位置付けています。今後もさらに研究開発を強化していくという観点から、千葉大学のま



すますの画像技術、印刷工学の分野においてより一層の協同を進めていき、今後もより一層関係強化をしていきたいと切に思っております」と述べた。

百周年記念会会長を務めた湯本好英氏からは、百周年を記念して卒業生から寄付を募り、同大学印刷実験工場内へ設置される「イメージング教育ラボ」について説明があった。同ラボは画像工学や色彩工学の研究・教育の中心となり、また高度光環境空間制御実験室の設置や、最新のカラーマネジメント環境と分光放射輝度計等が取り入れられる予定という。「カラーというものが、実態としてどういう形で何が行われ、再現するとはどういうことなのか、などについて体験的に勉強できる施設を作りたいと考えております。画像の中でも色にまつわる部分は大変大きなファクターであり、これについて体感的に学習できる優れた環境を提供したいと思います。2年半くらいかけて、百周年記念行事の準備をして参りました。この場を借りてお付き合いいただいた同窓会幹事の皆さんには大変感謝しております」。



引き続き、蒲嘉陵北京印刷学院副学長を講師に迎え、「大学での画像教育：今と未来」(Image-related Education at university level: today and tomorrow)をテーマに記念講演が行われた。

蒲氏は、グラフィックコミュニケーションの大きな展開としては、Written Communication、



Printed Communication、Multi-media Communication の3つの段階と見ており、外壁や洞窟の内壁に顔料などを使って描かれた画像や文字ライクなシンボルから、活字が発明され印刷が盛んになり、「今の段階はデジタル化、Multi-media Communication の世界」と解説。

中国における過去十数年の書籍の売上推移については、「印刷した書籍は非常にスムースに伸びている。みんなスマートフォンやタブレットを使っているにもかかわらず、かえって少し上昇するようにも見える。一方、本の在庫は、2005年以降、在庫の方が売っている本よりも多い。書籍から見ると中国の場合は、約4～5%の上昇率で健全な産業だと理解していただければ」と解説。

また、もう1つのデータでは、「普通の出版物は2012年を頂点に、徐々に落ち込んでいる。一方デジタル出版物は大きな上昇率で伸びており、平均上昇率が2ケタ、30%前後。これを見ると、中国では普通の出版物も発展しているが、やはりピークを過ぎて減ってきており、デジタルはものすごい勢いで上昇している」という。

2015年の出版物の内訳を見ると、大きな割合を占めるのが印刷した出版物で約822億人民元、前年度4%増。新聞は同10%減、雑誌、CD、VCDも減少傾向にある。これに対してデジタルは上昇している。「4000億人民元を超え、前年比30%増。中でも一番貢献が大きかったのはコマーシャル。モバイルパブリッシングも24%を占めている。ゲームは20%を占める。また、半分の中国人の約半分がスマホ、携帯電話などを通じてネットにアクセスしている。中国人の約半分はNetizens（ネットワーク上の仮想の市民）になり、そのうち90%以上はスマホ、携帯電話でネットにアクセスしている。2015年は1週間で平均26時間弱、毎日ほぼ4時間ネットにアクセスしていることになる。『低頭族』と言いますが、みん

な頭を下げる何かやっている」。

また、中国印刷産業の出荷高については、「まだ伸びてはいるが、上昇スピードが徐々に落ちて飽和しているように見える。去年の中国印刷出荷高は1万億人民元。米ドルに換算すると1800億米ドル超。一方、成長率は時間とともに減衰。2ケタ上昇率は2013年から1ケタになっている。去年は5%以下になった。2015年の中国の印刷産業の状態はGDPに換算すると1.81%で、産業としてはやはり大きな産業。その中でもパッケージング印刷が一番大きく、去年の出荷高1420億ドル超、上昇率は5.5%以上。出版印刷はマイナス成長率。複写ももっと大きな減少を見せてる」という。

従業員数は、2015年は300万人超、印刷企業

は10万社を超えてる。そのうち、パッケージング印刷会社が一番多く5万1000社とのこと。

中国の大学における印刷教育については、「印刷はこれだけ大きな産業なので印刷教育をきちんとしないと、産業は維持できない。大学としては1つの責任として真剣に考えなくてはいけない」とし、印刷教育のコアとなる可視化、微細加工を中心に、それに関わるComputer Sci.Tech、Information &Communication Eng.、Mechanical Engineering、Material Science & Engineeringといった学科とともに教育フレームを構築していくことができると述べた。

その後、フードコートにて記念祝賀会が開催された。

